

となる分布調査方法の開発が急務であった。

分布調査の新方式（ブロック分割定点調査法）の概要は以下の通りである。調査区域を500m四方のブロックに区分けし、各々のブロックの中に一点、ブロック全体の状況が把握できる定点を定め調査者を配置する。調査者はトランシーバで連絡を取り、群れの広がりや、同時に発見されている他集団との関連をつかむ。

1990年8月2日から8月8日にわたって屋久島の西部林道地域、9.75km²の調査を行った。この地域の一部では、長期研究により隣接する群れの行動域が把握されている。定点の調査者はサルを観察の未経験者がほとんどであった。資料は、まだ分析中であるが、直接追跡された群れの動きを、定点の調査者がどれだけ把握できていたか。また、既知の群れ数をこの方法によってどれだけ把握できたかを検討し、この方法の信頼性について若干の検討をくわえる。直接追跡された群れの動きを30分毎に区切ると、その位置の65%は、1点ないし2点の定点から捕捉された。また、群れの分布がわかっている半山地域（3km²）では、10から12群の発見がみこまれるが、この地域での2日に渡る定点調査によって9群が確認された。各々の定点からの群れの捕捉率はかなり低い、それを集計し群れの数を検討するとほぼ実数に近い数がでてくるようだ。今後、群れの捕捉率に影響している要因の分析を行い、この方法の信頼性や、でてきた群れ数の補正の仕方を詳しく検討していく予定である。

計画2-5:

ヤクザルの糞分析による上部域・下部域における食性の比較研究

大竹 勝（日本モンキーセンター）
長井三郎（屋久島産業文化研究所）

ヤクザルの野生群における高度差による食性の違いを明らかにするために、1988年より3年間上部域と下部域において定期的に糞の収集を行い、水洗乾燥して実体顕微鏡で分析を行った。秋には上部域においては群れの分布及び食性の観察調査を行った。上部域は黒味林道1000~1200m付近、下部域は瀬切、川原の西部林道で調査を行った。

上部域の糞内容は繊維質が年間を通じて比率が高く、樹木の枝先と葉が多くササの葉も少量認め

られた。針葉樹の葉が少量認められたが、出現状況から外部付着の可能性が高い。種子は夏のホウロクイチゴの最盛期以外は比率が高くない。量は多くないがタイミンタチバナは秋から春まで長期にわたって検出された。ヒサカキは秋から冬にかけて検出した。種子で同定したのは12科17種であった。キノコは冬から春の種子が少ない時期に比率が高い。昆虫は夏から秋にかけて比率が高く甲虫類とアリ類が多い。他の動物質のものではカタツムリ類クモ類、ヤスデ類、サワガニが検出された。直接観察で、スギゴケの胞子裏の採食と有毒きのこのニガクリタケの採食を観察したが糞分析では確認できなかった。

下部域では年間種子の比率が高く、種類も多く同定した種子は19科32種と多い。量として多いのがアコウ、イヌビワ、ハゼ、アカメガシワ、シマサルナシ、タイミンタチバナであるが、上部域のように種類が限定されないで複数の種類が含まれる。いね科種子及び類が多く検出されたが未同定である。キノコも検出したがあまり多くはない。昆虫は上部に比して少ないが年間を通じて検出した。秋に直翅目のバッタ類の断片が多く検出されたのはいね科植物とともに、草の多い林道同辺での採食と関連が深いことを示している。昆虫類はいずれも断片で種の同定に至っていない。他の動物質ではヤスデが少量検出されたがクモ、カタツムリ、サワガニは認められなかった。

上部では樹木の葉や枝先を主として、果実、キノコ、昆虫、クモなどを採食しているが、下部では種子の占める割合が非常に高く、葉などの繊維質は多くない。種子の上下共通種は6種類しか認められなかった。

課 題 3

計画3-1:

チンパンジーの体毛による父子判定

高崎浩幸（京都大・アフリカ地域研究センター）

複数の繁殖オスがいる場合、行動解析だけでは、父親の判定は推定の域を出ない。したがって繁殖成功度の研究には遺伝物質を裏付けとした父子判定が不可欠である。血液などの採取が可能な種には、DNAフィンガープリンティング法が適用できるが、捕獲が実際上不可能な種では、ほかの方